

【最優秀賞】

真の美

永吉 真果（大阪府 大阪教育大学附属平野中学校 2年生）

「見えないけれど、持っているもの。見えないけれど、そのひとがたいせつに抱えているもの。そんな目に見えないものが人間にはいっぱいくっついていて。」

私は中学二年生になり、見た目に興味を持ち始めた。保健体育の授業でも、思春期になると、周りの人と自分を比較し、客観的に見る事ができるようになると同時に、自身の欠点や短所が見えてくると習った。芸能人や周りの人の「見た目」について友達と話す機会も多くなってきており、人間の一生において「見た目、容姿」は、どのくらい重要なかを改めて考えたく、この作品を手にとった。

「私は痛いくらいに知っているもの、世の中見た目だって」

田沼涼子。この言葉は、彼女の本音であり、感じていることなどではないだろうか。周りのみんなから、容姿について何を言われても涼しげな顔でかわしている姿が印象的だった。例えば、クラスでの席替え。マサにひどい言葉を投げつけられ、周りからも

笑われているというのに、彼女は表情ひとつ変えず、淡々としていた。私がかもし、同じ状況に立たされたら、きっとその場にいられなくなると思う。自分のことを「これ」と、物のように扱われたら、生きていることを否定されたようで、耐えられないだろう。だから涼子は強いと思う。周囲の人達が、そうさせたのだからか。それは、決して良いことではない。周りが涼子を強くさせて「しまった」のだ。涼子が生きる場所を、強くなければいけない環境にしてしまったのだ。すぐもつたいいことだと思ふ。涼子が、もっと自由に、悩みも相談できる環境が整うなら、きっと彼女の魅力が最大限に発揮できるだろう。拓郎が感じた彼女の魅力を。

しかし、それができていないから悩んでいるのだ。人間には、顔がついていて、その顔は一人ひとり違う。一般的に美しいといわれる亜美奈のような顔もあれば、その反対もある。そして、その後者を馬鹿にする人間がいる。事実だ。この作品でも、その事実は最後まで変わらなかった。

人間が、一つの何かを見て感じることは、一人ひとり違う。だから、美しいと思わないものがあって当たり前だと思う。大切なのは、見た目じゃなくて心だ、とよく言われるが、全くその通りだと感じる。それこそ、涼子の魅力は心にあるのかも知れない。

でも、だからと言って、全ての人の顔を心から好きになれるかと聞かれたらどうだろう。人には「好み」というものがあるし、それはむずかしそうだ。作品のなかにもあったが、こんなことを言うとは、性格が悪いと思う人がいるが、自身の気持ちに正直になれば、そういう答えがでる。人の大切などころは、見た目じゃなければ、見た目はやはり大切なものかもしれない。

「ムジューンしてんな、世の中って」

拓郎が感じたムジュン。私は今、そんな拓郎にとっても共感している。たくさん矛盾が生じるこの問題で、一つ確実なことがある。それは、人を決して傷つけてはいけない、という事である。見た目に限らず、何があっても人を傷つけてはいけない。良いと思わない、と感じるのは自然に起こってしまいが、それを発信するのは自然には起こらない。ちよつと立ち止まって考える。みんなが同じ考えではないこと、誰かが傷つくかもしれないということ。そうすれば、きつとみんなが自分を好きになつていくはずだ。

もともと、顔は感覚器の集約である。それが時を経て、人間は顔から「美」を求めたくなつた。そして今、私達はものすごく狭い美を絶対としている。作品のなかに登場した、おばあさん。何か人を引きつけるオーラがあつたように思える。それはなぜだろう。それはきつと、「広い美」を知っているからだと思う。彼女は、色んな美を知っている。見た目の美だけではない、真の美を。

見た目は、とても重要だ。でも、もつと大切なものがある。私は、あのおばあさんのように、たくさん美を知りたい。そのために、世間というサンングラスをとつて、自分の目で見ていこうと思う。中学生の私には難しいかもしれないが、少しずつでも、私の感じる美を探していきたい。そうすれば、きつと私の人生はラブリイなものになるだろう。

書名…ラブリイ!

著者…吉田 桃子